

# 周産期母子相互作用の臨床的研究

竹内 正七 (新潟大学産婦人科)

吉沢 浩志 (新潟大学産婦人科)

周産期センターとしてのわれわれの分娩部に対する地域の認識が高まるにつれ、年々胎内搬送例が増え、NICUにおける母子相互作用も一歩踏み込んだ取り組みが行なえるようになりつつある。

周産期母子相互作用の臨床的研究として、(1) 周産期における妊婦の心理的变化、(2) 母親学級の在り方、(3) 疾病児をもつ両親の心理状況、(4) 家族看護 family care の具体化を研究課題とし、昭和58年度は妊婦の心理的变化について報告した。

昭和59年度は周産期医療の地域化に関する調査と極小未熟児の発達調査を行ない、現行の体制の問題点を検討した。

## 1. 周産期医療の地域化に関する調査

周産期母児管理の地域化の重要性は衆人の認めるところであるが、その体制作りの遅れている新潟県内の現状調査を行った。

調査は新生児医療の側から見た周産期管理を主目的とし、県内の病・医院で産科、小児科を標榜する190施設にアンケート用紙を送付し、126施設66.3%から回答を得た。

種々の検討の結果、低出生体重児のうちでも養育医療届出数で行政側と医療側との把握数に大きな差がみられ、この事は退院後も長期間の経過観察を必要とする児に対して、退院後家庭での養育における地域ぐるみのback upで、保健婦・助産婦の訪問指導に重要な意義があると考えられることから、十分な指導が行なわれていないのではないかと危惧された。

われわれの分娩部NICUに収容された児については、退院時に所轄保健所あてに連絡票を送付し、患児の問題点と今後の治療方針に添えて、退院前の母子接触の様子の観察の中から得られた情報を基に訪問指導に対する医療側の要望も連絡している。訪問指導後は報告書が届き、以後の検診時にfeed backするシステムがと

られ、相互に連絡を取り、母子相互作用の促進に対する努力を行っている。

こうした体制を新生児医療に携わる県内医療機関に求め、医療側、行政側の協力を密にして、地域ぐるみで母子相互作用の促進を図る必要のあることが判明した。

## 2. 極小未熟児の発達調査

われわれのNICUで管理した極小未熟児は本調査を行なった昭和59年9月までに総数100名である。

死亡例は24名で、今回は生存退院児のうち月齢6カ月以上の55名を調査対象とした。

調査は津守・稲毛式乳幼児精神発達質問紙を用い、患児および母親(養育担当者が別の場合はその担当者)に面接を行なった。里帰り分娩、遠隔地等のため来院できない例には質問紙を郵送し、電話でも情報を得た。面接者はNICUに勤務する医師と看護婦で、対象児が入院中に養護にあたり、母親はじめ家族と接触の経験のあった者とした。

対象児55名中、追跡できなかった児が5名あり、郵送例は9名であった。50名の発達指数(DQ)を図1に、修正年齢によるDQを図2に示した。面接調査による情報も加え、修正年齢でのDQ85以下の4症例の問題点を検討した。

症例1 修正月齢28カ月。在胎29週、出生体重832g、院外出生児。入院中の問題は特になく、115日に退院、身体的発育は順調で14カ月で独歩可、18カ月で一応の観察を終了した。一人っ子で、育児担当者は母親であるが、退院後の生活は母の実家に帰っての生活がほとんどで、祖父母・母との生活が主となっており、他の子供と遊ぶ経験に乏しかったようで、大事に育てられ過ぎて未経験の部分が多く、母親も児の成長に対する観察に不十分さが目立つ調査結果であった。退院後の指導が不足していた例と考えられた。

症例2 修正月齢17カ月, 在胎36週, 出生体重1,350g, 院外出生児。双胎の小さい方の児で, 痙攣, 無呼吸発作を主訴に入院し, 症候性血糖症と診断した例で, 児側の要因で発達の遅れのみられる例と考えている。

症例3 修正月齢12カ月, 在胎33週, 出生体重1,420g。母は33歳で重症妊娠中毒症合併, 胎児仮死のため帝王切開が施行された。児の入院中は問題なく, 身体的発育は順調。家業は農業で, 5歳の兄がいるが, 育児担当者である母に意欲が感じられず, 観察期間中父親, 兄に会う機会は一度もなかった例で, 児を囲む環境に問題があると考えられ, 地域担当者とともに積極的に

育児環境の改善に関与したいと考えている。

症例4 修正月齢10カ月, 在胎35週, 出生体重1,420g。母は32歳, 精神病合併。重症妊娠中毒症, 胎児仮死のため帝王切開が施行され, 児のみ紹介された。育児担当者は祖母で地域担当者とともに母親を加えた対策を立て, 児の養育に努力をし, 効果が現われつつある。

極小未熟児の発達調査の結果, 家族看護も個別化した対応の重要性が痛感され, 最近は胎内搬送例が増加してきたこともあり, 出生前から家族とともに児の受容の準備が行なえるるう接触を深めたいと考えている。

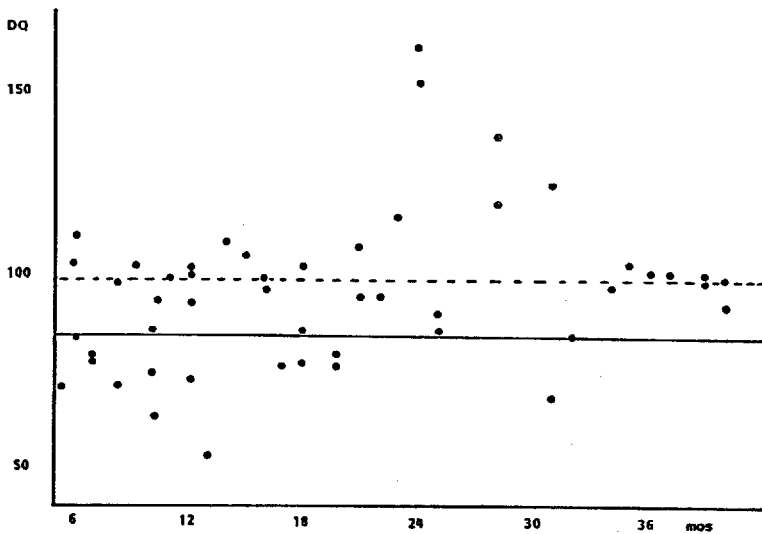


図1 Developmental Quotient of NICU admitted EI/VLBW Infants (Chronological Age)

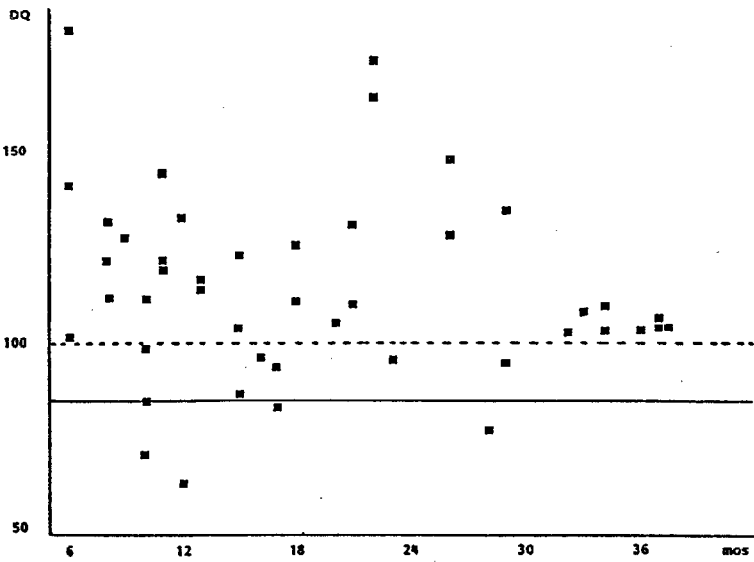
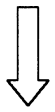


图 2 Developmental Quotient of NICU admitted EI/VLBW Infants (Corrected Age)



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



周産期センターとしてのわれわれの分娩部に対する地域の認識が高まるにつれ、年々胎内搬送例が増え、NICU における母子相互作用も一歩踏み込んだ取組みが行なえるようになりつつある。

周産期母子相互作用の臨床的研究として、(1)周産期における妊婦の心理的变化、(2)母親学級の在り方、(3)疾病児をもつ両親の心理状況、(4)家族看護 family care の具体化を研究課題とし、昭和 58 年度は妊婦の心理的变化について報告した。

昭和 59 年度は周産期医療の地域化に関する調査と極小未熟児の発達調査を行ない、現行の体制の問題点を検討した。